「思考・判断・表現力（活用力）」を育てる英語科授業開発（中学校）
ー 新教材（伝記・記録）による「生きる力」の育成 ー

教職実践応用領域　授業づくり履修モデル
早川 淳司

1　豊かで主体的な読書力、コミュニケーション力の育成　—本校の学校教育目標の中心—

（1）本校（刈谷市立朝日中学校）における概要

現任校の刈谷市立朝日中学校は、依佐美中学校の分校として1988年創立、生徒数は825名で、市内では最も新しく多くの生徒が通う学校である。刈谷市には自動車関連の企業が多く存在するため、本校学区には他の地域から移り住んだ家庭が多く存在する。そのためか、明るく活発な生徒たちの姿がある反面、人間関係が希薄で、相手の立場に立った言動を取ることができない姿が見られる。このような実態を踏まえ本校では、生徒会を中心とした挨拶運動や地域の清掃活動等といったボランティア活動を積極的に行うことで、校訓「まごころ」を合言葉にしながら、人間的な心と心のつながりを大切にした教育活動を推進している。

（2）本校における「読書活動の推進」と「言語活動の充実」

学校教育の共通課題としての「言語活動の充実」が重視されるようになり、その中でも特に「読書活動の推進」は重要課題の一つになっている。本校では、生徒の読書をより豊かなものにするために、朝の読書活動を開校当時から行っている。「携帯小説」の恋愛本や「アニメ小説」を好む生徒が多い反面、最近では生きた証の記録（事実の記録）として、伝記や著名人（芸能人やスポーツ選手）の手記を読む生徒も多い。では、読書嫌いの生徒や文字の少ない単純・明快な本を好む生徒がいる一方で、読書を通して「生き方」について触れたいと思う生徒が増え始めたのはなぜだろうか。それは思春期を迎えた「自己の生き方」を、多様な価値観の中から、その子なりに模索し始めた現れではなかろうか。「生きる意味とは何か」ということについて、生徒たちは少しずつながら考え始めている。

2　英語科教育の課題

（1）これからの英語科コミュニケーション能力と教材の広がり（伝記・記録・伝統文化など）

物語の正確な読み取りや、偉人の生き方に触れるといったような言語活動は、何も国語科の授業や読書活動だけで行われているわけではない。英語科の教科書にも、語彙や文法表現、コミュニケーション力を育成するための単元に加えて、伝記・記録教材が多数掲載されるようになった。例えば、New Horizon2には出生時に不慮の事故で失明した、沖縄県出身ラテン系テノール歌手新垣勉氏の伝記が掲載されている。差別や偏見で苦しむ彼を、出会う多くの人たちが支え、自分しかでき得ない生き方を見つける。私はこの伝記に出会い、彼の著書を読んだり、積極的に曲を聴いたりするようになり、自分らしく生きることの意味について真剣に考えるようになった。しかしながら、これまでの英語科授業では、これらはいわゆる入試対策のための長文読解の単元として扱われるのみであった。伝記・記録教材を入試のためのリーディング練習としてのみ位置付けるのでなく、著者の思いや考え、生き方そのものについて読み味わうことができる生徒を育てたいと考えるようになった。

（2）「自分の考え」や「解釈」を分かりやすく英語でまとめ伝える

刈谷市では毎年10月に英語スピーチコンテストを開催している。各校での予選会を通過し、代表スピーカーとして選ばれた生徒たちは、実に生き生きと自分の考えや気持ちを英語で表現する。しかし、英語が好きで意欲的に学習している生徒たちでも「分かりすいスピーチが書けない、うまくまとめられない」「英語では自分を語れない」という声を耳にする。ましてや英語に苦手意識をもっている生徒たちはまず覚えること、テストで点数が取れるようになること等で精一杯という面がある。こうした実態は英語コミュニケーションの技能面の指導とともに、英語科教育の授業改革の必要性を感じさせる一つである。

3　「思考・判断・表現力（活用力）」を育てる英語科授業開発の視点

（1）英語科における「言語活動の充実」とは

平成20年中教審答申の「言語活動の充実について」には、「①与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること（話すこと）、②話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり、賛否やその理由を示したりなどすることができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえること（読むこと）、③自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと（書くこと）」等が示されている。このことから、実際に英語を使うことができる言語運用能力とともに、身に付けた知識を十分に活用するための知的活動（思考・判断・表現力）や、コミュニケーション、感性・情緒の基盤としての社会言語能力を高めていく必要がある。

（2）「思考・判断・表現力（活用力）」を重視した教育課程（カリキュラム開発）の必要性

文部科学省による各種学力調査等によると、日本の児童・生徒たちは「必要な情報の関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結び付けたりすることが苦手」である。このことから、英語科の学習においても、基礎・基本となる知識・技能（「習得」）を全員に確実に身に付けさせ、それを全員に活用、メタ評価させるような具体的な「言語活動」の選択・整理と重点化、シンプルな授業・評価システムの開発と実践提案が必要不可欠である。そこでリーディング活動を軸とした「思考・判断・表現力（活用力）」を高める学習課程を以下の【表】のように構想・設定した。

【表】「思考・判断・表現力（活用力）」を高める学習モデル

段階	習得１	習得２	活用１	活用２
	導入	理解	思考・判断	表現
	読むこと 聞くこと		書くこと 話すこと	
つけるべき言語力 ―到達目標（評価規準）―	1. 聞く姿勢・態度の基礎 2. ﾃｷｽﾄ情報への関心・意欲化 3. ﾘｰﾃﾞｨﾝｸﾞ・ﾘｽﾆﾝｸﾞの基礎の習得 4. 情報ﾘﾃﾗｼｰの基本（ｷｰﾜｰﾄﾞ、資料等の正確な理解）	1. 目的やﾃｷｽﾄ形式にあった理解力 2. 限られた時間のなかでの理解力 3. 内容の正確な理解と音読（口形、発音、強弱、ｲﾝﾄﾈｰｼｮﾝ、ﾘｴｿﾞﾝ等） 4. ﾒｯｾｰｼﾞの正確な理解	1. ｴﾋﾟｿｰﾄﾞの選択と構成 2. 資料の選択と活用や効果 3. 自分の考えや解釈をもつ 4. 伝えたいことの論理的な文章構成	1. 与えられた時間の中での、効果的な表現 2. 非言語情報（写真、絵、グラフ等）の効果的な表現 3. 「考え・解釈」の交流と学び合い、自己評価 4. 他教科や経験に生かす
言語力を高める基礎	1. 学校全体における言語環境の整備 (1) あいさつ、礼儀などの生活規範 (2) 読書活動の推進 (3) 伝え合う学級、学校づくり		2. 英語科における言語環境の整備 (1) 楽しく分かる英語科授業 (2) 異文化理解と日本人のｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨ (3) 小学校高学年からの系統性、高校への連続性 (4) 英語ｽﾋﾟｰﾁｺﾝﾃｽﾄの重視	

（3）学習到達目標と評価規準（基準）

①リーディング・リスニングの楽しさと「習得」

・リーディングの場面では、内容理解を踏まえ、姿勢や教科書の持ち方、聞き手に伝わる声の大きさと声量・正しい発音、スピード、イントネーション、リエゾンに注意して発話することができる。

・リスニングでは場面・文脈の理解にかかわるキーワード・構文・文法事項に注意して聞いたり、必要に応じてメモを取ったりすることができる。

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度（日常的な言語理解の基礎―習得―）】

②分かりやすい英語コミュニケーション能力の習得から活用へ

・英語的表現の基礎である不定詞や接続詞を効果的に使ったスピーチ原稿を書くことができる。ここでは、特に不定詞（want to）や接続詞（think, if, when, because）の形・意味・用法をコミュニケーションに生かす立場から正しく理解することができる。

・特に、全教科・活動・コミュニケーションに生きる「はじめ・なか・まとめ・むすび」の公的なレポートの型（報告・論文の型）を理解し論理的に書くことができる。

【外国語表現の能力（論述・説明・構成―習得・活用―）】

③認め合いかかわり合う中で「自分の考え・解釈・判断力」を鍛える

・リーディングでは新教材（伝統文化・異文化理解、伝記・記録、自然科学等）の内容を正確に読み取ったり人物の生き方に共感したりしながら、「自分の考え・解釈」をもつことができる。

・スピーチでは、友だちの主張や考えの特色を正確に聞くことができる（キーワードのメモができる）。次にスピーチ内容と構成・英語的な表現の工夫や特色等について観点ごとにキーワードをメモしたり、自分の考え・意見、アドバイス等をもつことができる。さらに、かかわり合いの中で互いの良さや相違点を踏まえて、認め合い深めることができる。

【外国語理解の能力（「考え・解釈」の理解からかかわり合いへ―習得・活用―）】

④新教材を生かす「言語活動の充実」の視点

新学習指導要領を受けた新教材（伝統文化・異文化理解、伝記・記録、自然科学等）の理解を英語コミュニケーションに生かすことができるようにする。新教材設定の意図の背景には、複雑化する現代社会の中で、生徒たちが自国の伝統文化に誇りと自信をもち、異文化・情報理解を通じて「自分の考え・解釈」をもつことができること、そして自分らしい生き方を目指すことができるようになることである。

【言語や文化についての知識・理解】

4　研究構想

（1）研究構想にあたって

①生徒の主体的な関心・意欲を生かした授業

本研究では、英語科での言語活動を充実させる工夫として「思考・判断・表現力」を高めるコミュニケーション活動を設定することとする。まず、教科書の伝記・記録教材文のリーディング活動を通して、書かれ

ている事実を正確に理解する力を育てる。この時、教師が一方的に説明し生徒が受け身の活動に陥らないよう、生徒自らに気付かせたり、生徒相互に話し合わせたりする言語活動を工夫する。また音読については、口形や発音、強弱、イントネーション等に気を付けさせながら繰り返し練習させたり、登場人物の心情を理解させた後、その気持ちが伝わるような読み方を工夫させる等、生徒自らに考えさせたりする活動を行う。

②情報リテラシー、コミュニケーション力としての英語科指導

単元のまとめには、「考えを深めたり情報を伝えたりする」「気持ちを伝える」等、生徒が言語の働きを実感できるように、英語スピーチ活動を設定する。「互いの考えや気持ちを伝え合う」活動を行うためには、軸となる「論理的なコミュニケーション能力」を育成する必要がある。そこで、自作教材である「情報構成シート」を活用させる。「情報構成シート」をもとに、スピーチに必要な語彙・文法表現の定着を図りながら、「①はじめ（話題提示）の記述、②なか（具体例やエピソード）の記述、③まとめ（自分の考え）、④むすび（今後の目標）」の公的な構成の「型」を学習させる。そうすることで、英語で書くことに苦手意識をもっている生徒でも、既習の文法表現を用い、文と文とのつながりに注意しながら、自分の考えや気持ちを英語で表現できるようになると考える。そしてスピーチ原稿が書けたところで、「スピーチチェックシート」を活用させ、文法や発音の正しさ、そして仲間のスピーチの良さや改善点について生徒相互に評価させる。そうすることで、自らの学びを振り返り、今後の学習や生活に生かすことができるようになる。さらには、互いに学び会う価値や喜びを認識できるようになると考える。

（２）めざす生徒像

①テキストに書かれている事実を正確に理解しながら、主人公が伝えたいメッセージに迫ることができる生徒

②習得した知識・技能を活用しながら、課題を達成させるために必要な思考・判断・表現力を高めることができる生徒

（３）研究の仮説

【仮説１】

テキストの魅力を感じさせ（習得）、言葉の意味やメッセージについて考えさせる言語活動を設定すれば、出来事の継起を正確に理解したり、主人公の生き方に共感したりしながら主体的に物語を読み進めることができるようになるだろう（活用）。

【仮説２】

伝えたい内容を整理し、考えや気持ちを正確に伝えるための知識・技能を「習得」させれば、それらを活用しながら課題を達成させるために必要な「思考・判断・表現力」を高めることができるであろう。

（４）研究の手だて

【仮説１に対する手だて】

①テキスト・情報との魅力的な出会いの場の設定

導入時に生徒にとって馴染みのある曲を聴かせる。また、物語のあらすじについて説明しているDVD 教材を視聴させる。そうすることで、簡単なあらすじ（概要・要約）について正確に理解できるようになるとともに、自分の関心や生き方から進んで物語を読み進めるようになるであろう。

②英語科の特性を生かす音読活動の工夫

JTE や ALT とのティーム・ティーチングにより、英語と日本語の「音」の違いに気付かせる。そして、自作教材「音読の達人」を用いて、継続的にペアで音読練習させる。話し手には、音読のポイントである観点（口形、声の大きさ、発音、リエゾン、イントネーション等）に気を付けさせながら読ませる。また聞き手には観点が意識できていたかについて、話し手にアドバイスさせる。そうすることで、表現豊かに音読ができるようになり、さらには「英語を話したい」という意欲につながっていくだろう。

③段階的な読み取りと話し合いの場の設定

大まかな内容から詳細な情報を読み取らせるために、「概要（要約）→詳細→推論・考察、批評・評価」といった段階で読み取りをさせる。そうすることで、出来事の継起や主人公の心情の変化を無理なく理解することができるようになり、さらには主人公のメッセージ（生き方）に共感・批評、評価できるようになるであろう。

【仮説２に対する手だて】

①公的・論理的な「型」の習得

「情報構成シート」（はじめ【話題提示】の記述、なか【具体例やエピソード】の記述、まとめ【自分の考え】、むすび【今後の目標】や、既習の文法表現を例示した構成の型）をもとに、生徒の興味・関心のあるテーマについて英作させる。そうすることで、「書くこと」に苦手意識をもっている生徒でも、文と文のつながりに注意し、伝えたい考えや気持ちを整理して書くことができるようになるであろう。

②認め合いかかわり合う場の設定

英作文が出来上がったところで「スピーチチェックシート」を活用し、文法や発音等の正確さ、仲間のスピーチの良さや改善点について生徒相互に評価させる。そうすることで、文法的に誤りの少ない英文が書けるようになるとともに、話し手は聞き手を意識してスピーチできるようになるであろう。さらには友達とのかかわり合いによって、互いに学び会う価値や喜びを認識できるようになるであろう。

5　単元計画（11 時間完了）

段階	生徒の思考の流れと活動	仮説と手だて
	"My Only One" スピーチコンテストを開こう。	
導入	①新垣さんの紹介ビデオから分かることをまとめよう。 ・1952 年生まれだ。 ・沖縄の糸満市で生まれたんだ。 ・聖学校に通っていた。 ・上手な歌声だ。プロの歌手だな。	【仮説 1 手だて①】
	新垣さんは世界的なテノール歌手なんだな。	
理解	②音読活動で、英語らしい発音の仕方を身につけよう。	【仮説 1 手だて②】
	③新垣さんの生き方から、"Sadness of Okinawa（沖縄の悲しみ）" が伝わる表現を見つけよう。 ・I hate my father and mother.（両親が嫌いだ。） ・He was blind.（彼は盲目だった。）	【仮説 1 手だて③】
	新垣さんは障害や偏見、差別に苦しんだ。	
音読活動	④なぜ新垣さんの生活は「悲しさ」から「明るさ」へ変わったのだろう。 ・He also learned singing and he sang in church.（好きな歌を学び、そして教会で歌を歌える喜びを感じていたから。）	【仮説 1 手だて③】
思考判断	⑤新垣さんが生き方を通して伝えたいメッセージとは何だろう。 ・困難を乗り越えて努力すること。 ・出会いを大切にすること。 ・一番になるのでなく、自分しかできないことを見つけること。 ・どんなに不幸でも、人間は変われること。	【仮説 1 手だて③】
	⑥気持ちを込めながら音読発表しよう。	【仮説 1 手だて②】
	・新垣さんは苦難を乗り越えて自分しかできないものを見つけたんだ。 いろんな人の生き方について知りたいな。	
表現	⑦⑧⑨ "My Only One" というテーマで、偉人や尊敬する人物（身近な人も可）についての紹介文を書こう。	【仮説 2 手だて①】 【仮説 2 手だて②】
振り返り（一般化）	⑩⑪発表の基礎・基本を大切にして、"My Only One" というテーマでスピーチしよう。	
	・正確な英文が書けるようになった。 ・英語で分かりやすくスピーチできた。 ・自分らしい生き方とは何か考えてみたい。	

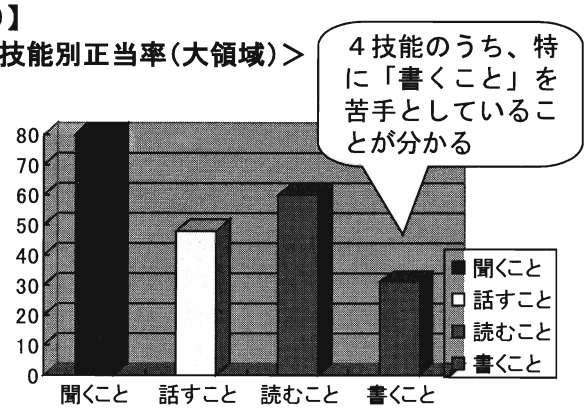
6　抽出生徒Ａの実態について

【教師による見取りメモ】

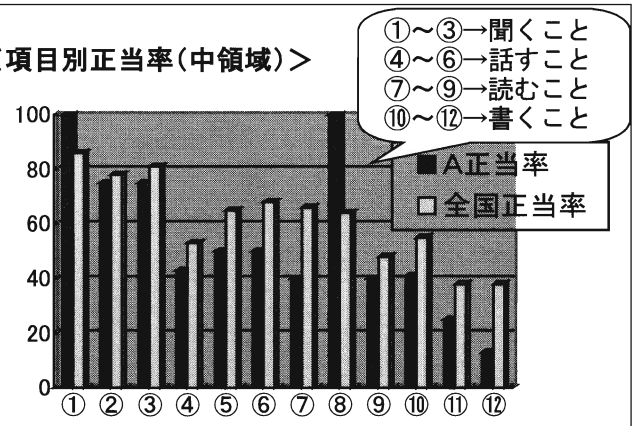
- 英語の学力は中位程度である。
- Ｑ＆Ａ形式の基本的な事項を問う質問には積極的に発言する姿がある。
- 読書が好きで、特にファンタジーや伝記の本を好んで読む。
- 学校生活では、自分の気持ちをうまく表現できず、級友と仲違いする姿が目立つ。
- 授業では、分からないことがあると、教師や友達に答えを求めたり、途中であきらめてしまったりする傾向にある。

【教研式標準学力検査の結果より（平成 23 年4月実施）】

＜4技能別正当率（大領域）＞



＜項目別正当率（中領域）＞



○全国平均を上回った項目	△全国平均を特に下回った項目
①基本的な英語を聞き取ること ⑧長文の大切な部分を読み取ること	⑥積極的に会話すること ⑪適切な語句を使って書くこと ⑫伝える内容を整理して書くこと

Ａは英語の聞き取りや長文の読み取り等、英語を理解する力に優れていることが分かる。しかし、積極的に英語を用いたり、伝えたいことを英語で書いたりする力（方法、評価観）には劣る傾向がある。英作活動で、何を書いていいかわからず、教師や友人に頼ってしまうＡの姿からも、この結果はうなずける。

【抽出生徒Ａに願う姿】

- 音読活動や本文の読み取りを通して、新垣さんの生き方に共感するとともに、これからの自分の生き方や願いについて見つめ直す機会をもってほしい。
- 友達とのかかわりの中で、スピーチのための英作文を粘り強く推敲し、自分の考えや気持ちを堂々と（自信をもち）英語でスピーチできるようになってほしい。

7　実践 "Try to Be The Only One"
―リーディング教材の「習得」から「活用」へ―
（１）導入・基礎学習【習得型学習１】（２時間）
―リーディング・リスニングの楽しさと「習得」―

単元の導入では、教材に関心をもたせるとともに、新垣さんの生涯について簡単にまとめさせたいと考えた。そこでまず、実際に新垣さんが歌う「さとうきび畑」「千の風になって」を聴かせた。歌詞に表現されている新垣さんの思いについても触れさせたいと考え、歌詞カードも配付した（資料１）。

【資料１：歌詞カード（第１時）】

「さとうきび畑」

【作詞・作曲】寺島 尚彦

ざわわ ざわわ ざわわ　広いさとうきび畑は
ざわわ ざわわ ざわわ　風が通りぬけるだけ
今日もみわたすかぎりに　緑の波がうねる
夏の陽ざしの中で

次に、新垣さんについて紹介するDVD教材で映像とともに、物語のあらすじを平易な英語で語り聞かせ（資料２）、自作の「聞き取り用ワークシート（一部省略）」に聞き取ったキーワードを書かせた。

【資料2：DVD教材による物語のあらすじ（第1時）】

He is a tenor singer Aragaki Tsutomu. Today he sang at a school as usual.

Aragaki Tsutomu was born in 1952. in Yomitan Village, Okinawa.

He became blind when he was a little baby.

One day, Tsutomu met a minister. The minister understood him.

This is Aragaki's old school. The students are studying with Braille.

He can see nothing, but he feels everything.

※アンダーラインはキーワードとして聞き取ってほしい箇所

Aは、生まれた場所（Okinawa）や生まれた年（1952）、盲目になってしまったこと（blind）など、キーワードを正確に聞き取った（資料３）。

【資料3：Aの「聞き取り用ワークシート」（第1時）】

★彼の生い立ちをまとめよう。

His name is (Tsutomu Aragaki) .He was born in (1952). He lived in (Okinawa). When he was a child, he became a (blind). After that, he met (a minister), and he wanted to become (a singer).

＜語句・表現＞

be born（生まれる）　met（～に会った）

became（～になった）

真剣に新垣さんの歌声に聴き入っていたAは、その日の振り返りに、「最初は嫌なことばかりおきていた」「歌で聴いている人に元気になってほしい」と記述した。このことから、新垣さんが障害をもちながらも、現在は人々のために歌い続けていることについて正確に理解できたことがうかがえる。これはビデオ教材から、簡単なあらすじをキーワードで聞き取ることができたからだと言える。また、「歌は自分の人間性が出る」と、新垣さんの歌声や歌詞から、新垣さんの人柄について触れる記述をした。このことから、今後物語を読み進めるにあたって、Aは新垣さんの生き方に少しずつ興味をもち始めていることがうかがえた。この歌声を聴かせる試みと、DVD教材による聞き取りは、物語の魅力を感じさせ、主体的に物語を読み進めることができるようになるという点で有効であった。

第２時より、帯活動として物語本文の音読活動を行わせた。実際に英語を声に出してみることで、英語で伝える楽しさを味わわせることができるとともに、内容理解にもつながると考えたからである。しかしながらこれまでの音読活動では、生徒たちの覇気がなく、「ぼそぼそ」と音読する様子が見られた。これは「読み方が分からない」「英語の正しい発音方法が分からない」「音読する機会が少ない」といった実態があると考えられる。そこで生徒たちに自作の「音読の達人シート」（省略）を配付し、「発音」、「声の大きさ」、「イントネーション（音の強弱）」、「リエゾン（音のつながり）」の４観点を意識させながら、ペアで音読練習に取り組ませることとした。

Aは始め、音読活動に対してあまり前向きな姿が見られなかった。そこで、ALTとのティーム・ティーチングにより、“lice”と“rice”の違いを使って、[l]音と［r］音を比較させる導入を行った（資料４）。

【資料４：音読の導入授業記録（第２時）】

ＪＴＥ：ご飯って、英語で何て言うのかな？

Ｃ１　：ライスだ。

ＡＬＴ：What did you eat for breakfast?

Ｃ２　：I have ライス！

ＡＬＴ：**Ｒｉｃｅ** is “ご飯”. But **ｌｉｃｅ** is “しらみ”. Did you have “しらみ” this morning?

Ｃ３　：え～！？しらみなんか食べてないよ！ライスの方！

生徒たちは、ALTの後に続けて、[l]音と［r］音の口の開け方や舌の使い方を練習した。「なかなかうまくいかない」と言う生徒には、口の開け方と舌の使い方の絵を板書するとともに、教師がおおげさにやってみせた。

この導入を機に、Aは［l］音と［r］音が含まれる単語に自らマーカーで線を引く姿が見られるようになった。これは、ALTとの導入により、英語と日本語の違いに気付き、特に「発音」に気を付けようとする前向きなAの姿と見て取れた。また第４時の活動後の振り返りにAは、「だんだん読めるようになってきました。友達に『うまくなったね』と言われ、うれしかったです」という記述をした。第６時に音読発表会をやること伝えると、「え～！！」という生徒たちの声の中に、「練習せないかん！」というAの声が聞かれた。継続して真剣に音読練習に取り組んだことで、「伝えたい」という意欲を高めていった表れと見て取れた。

（２）基本学習【習得型学習２】（４時間）

―新教材を生かし、かかわりを通して自分の「考え・解釈・判断」を鍛える―

①言葉の意味について考える学習

本文の終末には次のようなフレーズがある。“If you hear his song “Sugarcane Fields”, you can feel the brightness and sadness of Okinawa through his beautiful voice.（彼の「さとうきび畑の歌」を聴いたら、彼の美しい歌声を通して沖縄の明るさと悲しみを感じることができる）”この「沖縄の明るさ」と「悲しみ」という言葉に着目させ、それが伝わる表現について話し合わせる言語活動を行わせることにした。

1st Readingでは、“What's his name?”“When was he born in?”“Where did he live in?”など、大まかに読んで理解できるようなキーワードのみについて、ALTと生徒たちとのインタラクティブなやりとりで

答えさせた。導入の段階で簡単なあらすじについて理解できている生徒たちは、“Tsutomu Aragaki”“In 1952.”“Okinawa”と即座に答えることができた。2nd Readingでは、「新垣さんが14歳の頃、『“I want to die, too.”（僕も死にたい。）』と思ったのはなぜか」ということについて考えさせることで「沖縄の悲しみ」について迫り、そこから新垣さんの心情を理解させようとした（資料５）。

【資料5：授業記録とAの振り返り（第3時）】

Ｔ１　：新垣さんが“I want to die, too.”と思ったのはなぜだろう。
Ｃ１　：両親が嫌いだったから。（I hate my father and mother.）
Ｃ２　：目が見えなかったから。（because he was blind.）
生徒Ａ：祖母が亡くなったから。（Why did my grandmother die?）
Ｔ２　：ではなぜ祖母が亡くなって、自分も死にたいと考えたの？
生徒Ａ：（沈黙）
Ｔ３　：（全員に向かって）なぜ祖母が亡くなって、自分も死にたいと考えたか言える人はいますか？
Ｃ３　：それは祖母がずっと彼を育てていたから。（So his grandmother took care of him.）
生徒Ａ：えっ、それってどこに書いてあるの？（本文を読み返す）

（授業記録）

今まで先生が内容を解説する授業が普通だったので今日の授業は新鮮でした。新垣さんが必ずしも幸せな人生ではなかったことが分かりました。でも（先生からの）つっこみには答えられなかった。

（Ａの授業後の振り返り）

「沖縄の悲しみ」と、本文中にある新垣さんが経験した目が見えないことや祖母が亡くなったこととつなげて考えることができている。そこでＡが発言したところで、Ｔ１で新垣さんの心情を理解させようと発問した。しかし、Ａの発言はなかった。その後、Ｃ３の発言によって、Ａが本文を読み返す姿が見られた。授業後の感想に、「必ずしも幸せな人生ではなかったことが分かりました」と記されていることから、新垣さんの心情を、育てられた祖母の死という事実から理解しようとしていることが読み取れる。

ただ「つっこみには答えられなかった」と、本時の授業展開には難しさがあると考え、次時では、「沖縄の明るさ」という言葉の意味について理解させる際、「導入→本文の黙読→1st Reading（簡単なキーワードを問うことによる内容理解）→2nd Reading（T/F方式による内容理解）→3rd Reading（理由や根拠を問うことによる内容理解）」といった、さらに詳細な段階を踏んでリーディング活動を行うこととした。そうすれば概要から詳細までを無理なく理解できるようになり、Ａの「答えられなかった」というもどかしさを解消できると考えた。

②話し合いにより理解を深める学習

第４時では「沖縄の悲しみ」に続けて、「沖縄の明るさ」について生徒たちに考えさせた。1st Readingに入る前に、まず導入として、「沖縄ってどんなイメージ？」と全体に問いかけた。「明るい」「フルーツがいっぱい」という意見に加えて、「沖縄に行ったことあるんだけど、海と空がすごくきれいだった」「サンゴ礁もたくさんいたよ」など、生活経験を踏まえた意見も多く聞かれた。そして、「では、新垣さんにとっての『明るさ』とはいったいどんなものだったのだろうか」という問いを投げかけてから授業を始めた。

1st Readingでは、黙読の時間を十分取った後に、本文中の登場人物すべてに下線を引くよう指示した。生徒たちは“Tsutomu Aragaki”“The minister”“The minister's family”と解答することができた。2nd Readingでは、T/F方式で本文の内容に関する問いを４問出題した。Ａは２問目の質問である「“Tsutomu wanted to become a singer.”は“True?”それとも“False?”」に挙手し、「“False!”（誤り!）」と答えた。「それはどうして？」と尋ねると、「新垣さんはsinger（歌手）になりたかったかもしれないけど、（本文中には）singer（歌手）ではなく、minister（牧師）になりたいと書いてあるから」と、本文中の情報を手がかりにして正確に解答することができた。そして3rd Readingで、「なぜ新垣さんの生活は『悲しさ』から『明るさ』へ変わったのだろう」という学習課題を提示した。その際、その理由が伝わる本文中の表現に下線を引かせ、表現をもとにした読み取りを意識させた（資料６）。その後、ペアでの話し合いに移った。

【資料6：話し合いの記録とAの振り返り（第4時）】

Ｔ１　：なぜ新垣さんの生活は「悲しさ」から「明るさ」へ変わったのでしょうか。ペアで話し合ってみよう。
生徒Ａ：“Tsutomu started a new life as a member of the minister's warm family.”ってとこに線を引いたけど？どう？
生徒Ｂ：私も。
生徒Ａ：牧師さんと牧師さんの家族と住み始めたってことだよね。
生徒Ｂ：そう。あと“warm family”ってあるけど。
生徒Ａ：“warm”って何だっけ？
生徒Ｂ：温かい？
生徒Ａ：牧師さんの温かい家族のメンバーになったってことか。温かい家族と出会えたからだね。
あとP71に“Tsutomu is now proud of singing.”ってあるよね。
生徒Ｂ：えっと「歌に誇りを持っている」か。えっと、確か賛美歌を練習していたんだよね。
生徒Ａ：そう。だから賛美歌との出会いもそうだったかも。

（ペアでの話し合いの記録）

悲しいことばかりだったけど、牧師や温かい家族との出会いや、賛美歌との出会いで人生が変わっているのが分かる。祖母の死とかで、温かい家族で育ってこなかった新垣さんにとって、すばらしい出会いだったと思う。　（Aの振り返り）

個人によるリーディングの段階では、「牧師さんと牧師さんの家族と住み始めた」とだけワークシートに記述したAは、Bとの話し合いの中で、“warm(温かい)”という表現について指摘され、「温かい家族」と日本語訳を修正した。Bとの話し合いにより、“warm”という表現に着目できたことが分かる。さらにAは、“Tsutomu is now proud of singing.”という表現から、賛美歌との出会いによって、新垣さんが歌うことに誇りを持ち始めたことにも気付くことができた。Aの授業後の振り返りには、「悲しいことばかりだったけど、牧師や温かい家族との出会いや、賛美歌との出会いで人生が変わっているのが分かる」とあり、新垣さんが辛い過去を乗り越え、牧師や温かい家族との出会いによって自分の人生を大きく変えていったことを確かに読み取ることができたことが分かる。これはペアでの話し合い活動を通して、読みを深めていったAの姿と見て取れる。さらにAは、「祖母の死とかで、温かい家族で育ってこなかった新垣さんにとって、(温かい家族との出会いは）すばらしい出会いだったと思う」と記述し、これまでの読みを踏まえながら、新垣さんの心情に迫ることができた。これは段階的に物語を読み進めたことで、書かれている事実から、新垣さんの心情を推測しながら読み取るまでに至った姿と見て取れる。そこで次時では、このようなすばらしい出会いによって自分の人生を切り開くことができた新垣さんが、人々に伝えたいメッセージとは何かということについて迫ることにした。

③テキスト・物語のメッセージに迫る学習

第５時では、本文中から主人公の伝えたいメッセージが伝わる一文を抜き出し、それについて考えたことを発表する話し合いの場を設定した。学習課題を「新垣さんが自分の生き方を通して伝えたいメッセージとは何だろう」とし、まずは一人調べをさせることとした。

Aはワークシート(省略)に、“Try to be the only one, not just number one.”という一文を抜き出した。また、「自分に自信をもって生きていくことが大切だ」と記述した。このことからAは、物語のタイトルにもなっている「“Try to be the only one.”（唯一の存在）になること」という、新垣さんが最も伝えたかったメッセージに着目することができたことが分かる。また「自分に自信をもって生きる」と、新垣さんの思いをAなりの解釈で記述していた。そこでAの一人調べをもとに話し合いを進めることで、新垣さんからのメッセージに迫り、生徒たち自身にも、これからの生き方について考えてもらいたいと考えた（資料７）。

【資料7：全体での話し合いの記録とAの振り返り（第5時）】

Ｔ１　：新垣さんが生き方を通して伝えたいメッセージとは何だろう。
Ｃ１　：Ｐ71の５行目“Tsutomu is now proud of his singing .”から、歌声に自信をもつことが大切だというメッセージ。
生徒Ａ：付け足しで、Ｐ71の６行目に書いてある“Try to be the only one, not just number one.”を抜き出しました。一番になろうとするのでなく、努力してオンリーワンの存在になればいい。そして、自分に自信をもって生きていくことが大切だというメッセージを、新垣さんは伝えたかったんだと思います。
Ｔ２　：この部分を抜き出した人は他にいるかな？　（７割ほどの生徒が挙手する）
では、どうして新垣さんは自分に自信がもてるようになったのかな。
Ｃ２　：才能を見つけたから。美しい歌声で。
Ｔ３　：他には？
Ｃ３　：牧師さんとその家族との出会いがあったから。
Ｔ４　：そうだったね。新垣さんはたくさんの出会いによって、自分に自信をもって生きていくことができるようになったんだね。では、今みんなは自分に自信をもって生きていますか。
（全体での話し合いの記録）

新垣さんみたいに、私は自分にそんなに自信がありません。でも新垣さんのように、困難にぶつかっても、前向きに生きていきたいと思うようになりました。　（Aの振り返り）

Aが、「自分に自信をもって生きていくこと」と発言したところで、教師が「なぜ自信をもてるようになったか」と質問したことにより、C２が「才能を見つけたから」と、C３が「出会いがあったから」と発言した。そして、このことが新垣さんの人生にとって大きな自信につながったという事実を確認した後、「今みんなは自分に自信をもって生きているか」と全体に投げかけた。Aは「新垣さんのように、困難にぶつかっても、前向きに生きていきたい」と、新垣さんの生き方に共感し、これからの生き方について見つめ直すことができた。授業後に、「新垣さんの CD を貸してください。家で聴いてみたい」と話すAの姿から、物語の魅力を感じさせ、言葉の意味について考えさせる言語活動がAの心を動かしたのだと実感できた。

（３）発展的学習【活用型学習１】（３時間）
―自分の考えや気持ちを論理的にまとめる学習―

第７時からは“My Only One”というテーマで、偉人や尊敬する人物（身近な人も可）ついてスピーチさせた。Aは友達から「誰について書くの？」と聞かれ、「いつも本で読んでいる好きな歌手の人生について書きたい。でも英語で書くのは難しい」と答えていた。「本で読んでいる好きな歌手の人生について書きたい」という言葉から、Aの「伝えたい」という意欲を

感じた。そしてAの「英語で書くのは難しい」というもどかしさは、論理的な構成の「型」を習得させれば、英語で書くことが苦手なAでも、英語で分かりやすく伝えることができるようになると判断した。

そこで「情報構成シート」（省略）を紹介した。①はじめ（話題提示）、②なか（具体例やエピソード）、③まとめ（自分の考え）、④むすび（今後の目標）の順に文章構成させた（資料８）。このとき、既習の文法表現を活用してほしいと考え、英語で書くことが苦手な生徒には、ポイントと例文を示したシートを配付した。

【資料８：Aの英作文の取り組み過程（第８時）】

（話題）：自分の好きな歌手について。

（人物紹介）：「aiko」、「歌手」、「大阪出身」、「1975 年生まれ」

（エピソード）：子供の頃は一人で遊ぶことに興味があった。あまり目立たなかった。でも、歌手になって人を幸せにしてあげたいと思うようになった。

（自分の考え）：努力して歌に磨きをかけた。素敵な歌声で人々を幸せにしている。aiko さんはすごい人だ。

（今後の目標）：介護福祉士になって、人々を幸せにできる人になりたい。

（Aが書いた日本語メモ）

（疑問①）「遊ぶこと」はどんな単語を用いるか。そして、「～すること」としたいがどう表現したらよいのか。

（疑問①に対するAの取り組み）和英辞書で「遊ぶ」が“play”であることを確認した。また授業ノートを見直したことで、「～すること」は、動詞に“ing”を付ければよいことを確認した。

（疑問②）（自分の考え）の部分の日本語を、うまく英語で表現できない。

（疑問②に対するAの取り組み）教師に質問すると、「“I think she is a great person because ….”という書き出しで始めて、理由を「人々を幸せにしてあげていること」「美しい歌声をもっていること」と分けて書くと分かりやすい」とアドバイスをもらう。

（Aの英作文への取り組み）

I’m going to talk about aiko. She is a singer. She is from Osaka. She was born in 1975. She was interested in playing alone when she was a child. She became a singer. I think she is a great person because she do us happy and she has a sweet voice. I want to do people happy. I want to be a care worker in the future!

（Aの下書き英作文）

※Aが「情報構成シート」の「ポイントと例文」を参考にして書いた下書きの英文

※Aが辞書やアドバイスによって推敲した英文

Aは辞書や授業ノートを活用するなど、粘り強く英作活動に取り組む様子が見られた。また教師からのアドバイスを受け、理由を、“…because she do us happy and she has a sweet voice.”と英語で表現することができた（ただし“do”は文法的に誤り）。このことからAが構成の「型」を意識し、既習の文法表現を活用しながら、自分の考えや気持ちを分かりやすく英語で表現しようとしていたことがうかがえる。さらにAはこの日の振り返りに、「いつもより早く英文を書き終えることができた」と記述したことからも、「情報構成シート」を活用させたことが、伝えたい情報を整理して書くという点で有効に働いたことが明らかとなった。

しかしその一方でAは、「文法が合っているかどうか自信がない」とも振り返っていた。これは書くことに自信がなく、文法の正確さに不安を抱く素直な表れと読み取れた。そこで次時では、生徒相互に英作文を評価させる活動を取り入れることで、より正確な英文を書かせたいと考えた。

（４）発展的学習【活用型学習２】（２時間）
—認め合いかかわり合う中で「自己の生き方」について見つめ直す学習—

第９時は「スピーチチェックシート」（資料９）をもとに、文法や発音の正確さについて生徒相互で評価させた。

【資料9：スピーチチェックシート（第9時）】

スピーチチェックシート

Class　　No.　　Name

	チェック内容	例	チェック①	チェック②	チェック③
文法	①be 動詞と一般動詞を一緒に使っていないか。	×He is study English.			
	②単数形と複数形を正しく使い分けているか。	He is a soccer player.　She likes comic books.			
	③現在形と過去形を正しく使い分けているか。	He studied soccer yesterday.			
	④want to の文を正しく使っているか。	I want to play(動詞の原形) soccer player.			
	⑤think、because の文を正しく使っているか。	I think he is a great person because he studied hard. think、because のあとは主語＋動詞の順が基本。			
音声	①声の大きさ	教室の奥にいる子まで届く声で。			
	②発　音	r と l の音の違い、th の音。			
	③音のつながり（リエゾン）	a lot of, in a blue sky			
	④強弱（イントネーション）	The sun was bright in a blue sky.			
挨拶	①始めと終わりのあいさつをしているか。	Good morning, everyone.　Thank you for listening.			
	②絵や写真、文字カードを示しているか。	紹介する人物の写真、単語カードなど。			

生徒たちは積極的に「スピーチチェックシート」や辞書を活用しながら、友達の情報構成シートを真剣に評価していた。Aは普段から仲の良いBとペアを組んだ（資料10）。

【資料 10：生徒相互による評価の記録と修正されたAの英作文（第9時）】

生徒Ａ：人を幸せにするって“do people happy”でいいの？

生徒Ｂ：「する」だから“do”？ちょっと違うな…。調べてみようか。

（しばらく二人で辞書を眺める）

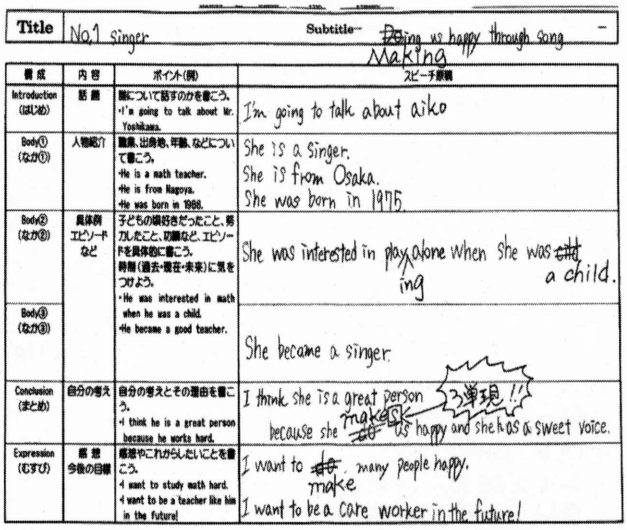
生徒Ａ：“make”か。「させる」だから、“make people happy”だね。

生徒Ｂ：そうそう。じゃあ直しておくね。

（Aの文に朱書きを入れる）

生徒Ｂ：（しばらくAの英作文とチェックシートを見比べて）これって三単現にするんじゃない？

生徒Ａ：どれ？あっ、ほんとだ。
（“make”に“ｓ”を付け加える）
（生徒相互による評価の記録）



Title	No.1 Singer	Subtitle― ~~Doing~~ Making us happy through song ―

構成	内容	ポイント(例)	スピーチ原稿
Introduction (はじめ)	話題	誰について話すのかを書こう。 •I'm going to talk about Mr. Yoshikawa.	I'm going to talk about aiko
Body① (なか①)	人物紹介	職業、出身地、年齢、などについて書こう。 •He is a math teacher. •He is from Nagoya. •He was born in 1988.	She is a singer. She is from Osaka. She was born in 1975.
Body② (なか②)	具体例 エピソードなど	子どもの頃好きだったこと、努力したこと、功績など、エピソードを具体的に書こう。 時制(過去・現在・未来)に気をつけよう。 •He was interested in math when he was a child. •He became a good teacher.	She was interested in playing alone when she was ~~child~~ a child.
Body③ (なか③)			She became a singer.
Conclusion (まとめ)	自分の考え	自分の考えとその理由を書こう。 •I think he is a great person because he works hard.	I think she is a great person because she ~~do~~ makes us happy and she has a sweet voice. 3単現!!
Expression (むすび)	感想 今後の目標	感想やこれからしたいことを書こう。 •I want to study math hard. •I want to be a teacher like him in the future!	I want to ~~do~~ make many people happy. I want to be a care worker in the future!

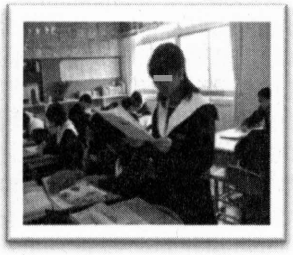
（修正後のAの英作文）

Ａは Ｂ との話し合いの中で、「～をする」という表現が“do”ではなく「(～の状態に)する」という“make”を使うべきだと判断することができた。さらには、「スピーチチェックシート」の文法項目③「現在形と過去形の使い分けができているか」をもとにして、“make”に三単現の“s”を付け加えることが適当だと判断したことで、英作文をより正確なものにすることができた。

このことから「スピーチチェックシート」を活用し、生徒相互によって評価し合ったことで、教師による添削指導のみに頼ることなく、生徒たち自身で正確な英文が書けるようになったことが明らかになった。またＡはこの日の振り返りに、「チェックシートがあったので、なんとか作文が正しく書けたと思います」と、正確な文が作れたことに達成感を味わっていた。また、「Ｂも（自分の原稿を）しっかり見てくれたのでうれしかった」と、仲間と学習することの価値を知ることができた。

第10時のスピーチコンテスト（写真）で、Ａは、“I want to make many people happy. I want to be a care worker. Thank you for listening.（私はたくさんの人々を幸せにしたい。私は将来、介護福祉士になりたい。ご清聴ありがとうございました）”とスピーチを締めくくり、聴衆から大きな拍手をもらった。

【写真：生き生きと英語でスピーチする様子（第10時）】



Ａはベストスピーカーには選出されなかったものの、同じグループ内の生徒から、「Ａさんが将来の夢をしっかりもっていて、偉いなと思いました」と評価され、スピーチ後はうれしそうな表情を見せた。単元最後の振り返りには、「将来は夢を叶えたい。人を幸せにしてあげられる存在になりたい」と感想を書いた。“make people happy”という表現にこだわりをもち、将来について生き生きと英語でスピーチするＡの姿に、「自己の生き方」について真剣に見つめようとする心の成長を感じた。

8　実践の考察
―自己の「生き方」に迫るための「習得・活用型学習」を軸に―

仮説１に対する手だて①では、新垣さんの歌声を聴かせたりビデオ教材によって簡単なあらすじを英語でまとめさせたりしたことにより、Ａは「嫌なことがあったが、今は歌で人々を元気づけている」と、新垣さんの美しい歌声に惹かれつつ、物語の大まかなあらすじを正確に理解することができた。

仮説１に対する手だて②では、ALT とのティーム・ティーチングによる導入で日本語と英語の音の違いに気付いたり、「音読の達人」で継続して音読練習に取り組んだりしたことにより、Ａは正しい発音の仕方を身に付けることができるようになった。

仮説１に対する手だて③では、「概要→詳細→推論・考察（批評・評価）」といった段階的な読み取りにより、Ａは本文中の“Why did my grandmother die?（なぜおばあちゃんは亡くなったの？）”から、新垣さんの悲しみが伝わってくると発言できた。またペアでの話し合いを通して、温かい家族との出会いこそが、新垣さんの人生を変えていったという事実についても読み取ることができた。さらに、「オンリーワンの自分を大切にすること」という新垣さんが最も伝えたかったメッセージに迫り、「困難にぶつかっても前向きに生きていきたい」と自分の生き方を見つめ直すようにもなった。

仮説２に対する手だて①では、公的な文章構成の「型」を示したことで、英語で書くことに苦手意識をもっているＡも、文と文のつながりに注意し、伝えたい考えや気持ちを整理して書くことができるようになった。これは、「情報構成シート」を活用させたことが有効に働いたからだと言える。

仮説２に対する手だて②では、ＡはＢとの話し合いにより、“do people happy”から、“make people happy”に英文を改めたり、三単現の付け忘れに気付いたりすることができた。さらには、新垣さんの生き方に触れたことを踏まえ、これからの自己の生き方について見つめ直すことができるようになった。これらは「スピーチチェックシート」による相互評価や、豊かに伝え合うスピーチ活動が有効に作用した結果だと言うことができる。

9　まとめにかえて―英語科授業と活用する学力、「思考・判断・表現力を育てる」評価観とは―

（1）　リスニングを通した正確な内容理解

内容理解にかかわるキーワード・構文・文法事項に注意して聞き取ったり、必要に応じてメモを取ったりすることができる（自作ワークシート開発と活用）。

（2）　英語らしい音読（音読の観点シート開発）

姿勢や教科書の持ち方、聞き手に伝わる声の大きさと声量・正しい発音、スピード、イントネーション、リエゾン等に注意して発話することができる。

（3）リーディング教材の学び方―新教材を生かす―

伝記・記録教材から読み取ることができる登場人物の人間性や生き方の輝き、生と死、悲しみや喜び等を生徒各自の「課題意識」「生き方」とつなげ考えられる。

（4）正確な英語による表現力・文章構成力

基礎的・基本的な語彙や文法を確実に習得させた上で、それらを効果的に使った英語スピーチ原稿を書くことができる。特に、全教科・言語活動・コミュニケーション能力に生きる公的なレポートの型（報告・論文の型）を理解し論理的に書くことができる。

（5）その生徒らしい表現力と説得力

①エピソードの選択と構成、②資料の選択と活用や効果、③自分の考えや解釈をもつ、④与えられた時間の中での効果的な表現、⑤非言語情報（写真、絵、グラフ等）の効果的な表現、⑥「考え・解釈」の交流と学び合い・自己評価、⑦他教科や経験に生かす等。

10　今後の実践研究課題とカリキュラム開発

本課題研究は「思考力・判断力・表現力」（活用型の学力）を育てる英語科の授業開発（実践提案）により、全員の生徒たちに英語によるコミュニケーションの楽しさと方法、学力を保証するためのものである。本研究は新学習指導要領の英語科教育課題に応えるとともに、中学校教育での「全教科・活動につながるカリキュラム開発」にも生かす提案でもある。

今後は、生徒たちが「習得（基礎・基本）」したことをもとに互いに認め合いかかわり合う中で、英語で自分の考えや気持ちをより豊かに・自分らしく伝えられる授業開発（習得から活用へ、活用を軸にした探究へ）を開発提案していきたい。また各教科や特別活動、道徳等の活動へ生かしていきたいと考えている。

なお、紙面の関係で今回開発した「学習（ワーク）シート」や生徒の作成原稿、発表による学び合いの詳細については省略させていただいたことをお断りする。

＜主な参考文献＞

1、中央教育審議会答申、学習指導要領等

・『小学校学習指導要領』（文部科学省，2008．3）、『中学校学習指導要領』（同）、『小学校学習指導要領総則』（文部科学省，2008．9）・『中学校学習指導要領総則』（文部科学省，同）・『小学校学習指導要領外国語活動編』（文部科学省，2008．8）・『中学校学習指導要領　同　』（文部科学省，2008．9）等

・『「英語が使える日本人」育成のための戦略構想』（文部科学省，2002．7）、『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』（文部科学省，2003．3）等

・『言語活動の充実について』（中央教育審議会答申，2008．3）、『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について』（中央教育審議会答申，2008．1）等

2、英語科にかかわる専門的・実践的文献

・高橋美由紀・柳義和著『新しい小学校英語科教育法』（協同出版，2011．6）、米山朝二著『英語教育指導法辞典』（研究社，同 8）、田中武夫・田中知聡著『英語教師のための発問テクニック』（大修館書店，2009．7）

・三浦孝・中嶋洋一・池岡慎著『ヒューマンな英語授業がしたい』（研究社，2006．3）、同著『だから英語は教育なんだ』（研究社，2002．4）等

・中嶋洋一著『学習集団をエンパワーする 30 の技』（明治図書，2000．6）、瀧沢広人著『中学生を英語授業にノセル裏技 49』（明治図書，1999．3）等

3、習得・活用・言語活動にかかわる文献

・『現代教育科学―特集 戦後「教育論争」から何を学ぶか―』（明治図書，2011．11）、『指導と評価―特集 各教科における思考力―』（図書文化，同 1）等

・佐藤洋一編著『国語科「習得・活用型学力」開発と授業モデル（4巻）』（明治図書，2011．11）、佐藤洋一・有田弘樹「生き方・判断力を鍛える『伝統的な言語文化』授業開発」（2012．10）、佐藤洋一・吉川和良「ノンフィクション（伝記）教材から『生き方』を考えさせる授業開発」（2011．3）等

・萩原孝「身近な人物、地域から世界に目を開く社会科学習」（愛知教育大学社会科教育学会，　1995．3）

・愛知教育大学附属岡崎中学校『生活授業研究会―ともに授業を語る会―』（研究紀要，2011．10）、同附属名古屋中学校『かかわり合いの中で学ぶ授業の創造』（研究紀要第 51 集，同）等

4、拙稿・研究発表等

・早川淳司「インターネット国際交流～書いて伝える活動を通して～」（岡崎市教育委員会，2004．3）

・　同　　「よりよい ALT とのコミュニケーション活動を実践するために」（刈谷市教育委員会，2005．3）

・　同　　「学び合い、高め合う授業実践～英語ディベート活動を通して～」（刈谷市教育委員会，2006．3）

・　同　　「話す意欲を高める英語コミュニケーション活動」（刈谷市教育委員会，2010．3）等

＜付 記＞

教職大学院において研修する機会を与えてくださいました愛知県教育委員会、西三河教育事務所、刈谷市教育委員会に、厚くお礼申し上げます。また、現任校刈谷市立朝日中学校・宇津野仁校長はじめ教職員の皆様には諸事情がある中、私の研修にご理解とご協力をいただき心から感謝しております。指導教官である愛知教育大学教職大学院の佐藤洋一教授、同萩原孝准教授はじめ諸先生方には授業実践や中間報告等について丁寧に御助言いただきました。また、同期の現職の先生方・院生の皆さんとの様々な交流から学ぶことも多く、今後に生きる私の貴重な財産になっております。

教職大学院で学んだことをこれから少しでも現場の先生方、生徒たちに還元できるように新課程の教育実践に生きる研究実践研究を進めていきたいと思っております。